

# キーワードで読み解く 大学改革の針路

第5回

## 学生FD



追手門学院大学  
基盤教育機構  
教授  
梅村 修

1992年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。帝京大学専任講師、美術館学芸員を経て2003年追手門学院大学助教授。同准教授を経て、2009年教授。専門は留学生教育、大学教育論、広告論。著書・編著に「アート・マーケティング」(白桃書房)、「学生FDサミット奮闘記」(ナカニシヤ出版)などがある。

### FDに関心を持つ学生の活動を大学がサポート

学生FDの先駆けは、岡山大学である。2001年、学生の意見を授業改善に生かすために、学生・教員FD検討会が設置された。だが、学生を公式な委員とするこの方式は広がらなかった。

授業、教育改善に関心を持つ学生が中心となり、多くの学生の声を集めて大学に改善を提案・要求する活動を、大学が予算や施設面で支援するという現在主流の学生FDは、立命館大学を嚆矢とする。2008年のFD義務化直後から、立命館方式は全国に広がった。著者の知る限り、今や、学生FDに取り組む大学は、80以上にも及ぶ。国公立よりも私立大学、大規模よりも中小規模大学で盛んである。学生FDは、教職員と学生の議論や学生による新しい授

業の提案など、各大学で多様な取り組みが行われている(図表)。

立命館大学の木野茂氏は近著<sup>\*1</sup>の中で、学生FDを「授業や教育の改善に関心を持つ学生が、その改善のために主体的に取り組む活動で、大学側との連携を求めるもの」と定義している。この定義を基に、自治会やピアサポート団体との比較で説明する。

一つ目は、「授業や教育の改善に関心を持つ学生」が活動主体という点である。自治会やピアサポートの学生は、必ずしも「授業や教育の改善」に熱心ではない。施設や設備の改善や学習支援に対する興味が先立っている。

二つ目は「(学生が)主体的に取り組む」点である。何よりも学生の「大学を良くしたい」という気持ちが根底にある。教職員は、学生を主体的な学修者として尊重し、基本的には学生た

ちの活動を見守り、困ったときに相談に乗るスタンスである。ピアサポート系の団体は、一種の業務的要素が強く、教職員による研修が前提である。

三つ目は「大学との連携を求める」点だ。学生FDは「学生とともに進めるFD」といわれ、教職員との協力関係を大事にする。自治会は大学との「連携」より「交渉」に傾く傾向がある。

### 教育の当事者である学生をFDに取り込む

1991年の「大綱化」以降、組織的なFDが行われるようになった。ところが、授業改善の歩みは遅い。教育力向上が緊急の課題であることはわかっているものの、「研究重視、教育軽視」の風潮は改善されない。そこで、教員の自己満足に陥りがちなFDに、授業のもう一方の主体たる学生の意見を取り入れたらどうか、「手ごわい顧客」としての学生を育てて改革の推進力にしたらどうかとFDに関わる教職員が考え、学生FDが誕生したのである。

また、意識の高い学生にとって、大学の授業は必ずしも満足できるものではない。学生FDは、有志の教職員やFD担当部署の呼びかけに応じて集まった学生が、授業に対する不満について公然と議論し、その改善を学生の視点から考える場となった。「大学を変える、学生が変わる」という学生FDサミット<sup>\*2</sup>で掲げられたスローガンは、学生たちの心に深く刺さった。

日本の大学独自の取り組みである学生FDは、授業改善だけではなく、教育改善全般に学生の声を反映させるものだ。「大学を変える、学生が変わる」というスローガンのもとで行われる学生FDを解説してもらう。

### 学生FDを通じて教職員の意識も変わる

学生FD活動は、本当に大学を変えたのだろうか。変化の胎動は見取れる。学生FDが活発な大学では、定番の活動である「しゃべり場」を経験した教職員が、素直に本音を語り合う学生の姿勢から、立場や年齢を超えて自分の職場について語り合う楽しさを知る。それが教職員の意識を変える。追

手門学院大学では、最近、教授会でも「しゃべり場」が始まった。

次に、学生FD活動は、教職員の学生に対する眼差しを変えている。学生は管理や教化の対象ではない。学生の力を信じて一緒に大学をよくしていこうという意識が、教職員に芽生える。

経営側も意欲的な学生が大学教育に参画できる環境を整えている。京都文教大学や追手門学院大学では、学長や理事長が積極的に学生支援に関わって

いる。東洋大学や中京大学、岡山理科大学、金沢星稜大学、鳥根県立大学などでも、マネジメントの観点から学生FDの発展が期待されている。

学生FDはまだまだ広がる余地がある。特に、小中規模大学には可能性がある。一般学生に働きかけやすく、成果も見えやすい。学生と教職員の距離も近いので、認知度を上げやすいのだ。一方、大規模大学では、日本大学で新たな展開を予感させる。

#### 実践例

## 日本大学 学生FD CHAmmit

### 全学のサミットで意欲を高め学部での主体的活動につなぐ



#### 全学部・学科の学生、教職員が教育を変える

日本大学は14学部85学科を擁し、学生数約8万人、教職員数7千人を超える日本最大規模の私立総合大学である。キャンパスは首都圏を中心に学部ごとに点在し、学部を超えた学生や教職員の交流はおろか、総合大学としての一体感を発揮するような取り組み、特にアカデミックな交流はあまりなかった。

そのような中、2013年度から「学生が変わる日本大学」をテーマに、「日本大学 学生FD CHAmmit」(「ちゃみっと」: ChatとSummitの造語)を開催している。カレッジやスクールの集合体といえる大学ならではの「学生FDサミット」

日本大学版である。全学部・学科から学生・教員・職員が一堂に会し、三位一体となって日本大学の教育について考えるイベントである。2014年度は約220人が参加した。

日本大学の教育理念は「自主創造」であり、「自主創造型パーソン」の育成をめざしている。「CHAmmit」の開催を通じて自主性と創造性を喚起し、その発揮を期待している。「よい授業とは?」をテーマとし、ワールド・カフェ形式で「学部ミーティング」と「オール日大ミーティング」を混在させて展開した。テーマや形式など、全ての企画や当日の運営は学生スタッフに委ねられているが、しっかりと教職員スタッフが支えていることが特徴だ。

#### 愛校心が芽生え授業に臨む姿勢が変化

全学的な活動と各学部の活動とは意識して分けている。「CHAmmit」で、学生がFDに参画する意義や学生・教員・職員が自由な雰囲気ですべて「気楽にまじめな話をする」大切さを知ってもらう。そうして蒔いた種から、各学部の個性に応じて花を咲かせ、しっかりと育てていく。「学部に戻り、学生FDについて何か行動を起こしたいか」という問いに対し83%が「必ず何かしたい」「機会があればしたい」と答えている。今後、個性豊かな花が日本大学の各所で咲き誇ることが期待される。

参加した学生からは「愛校心が芽生えた」「授業に臨む姿勢が変わった」との声があり、「CHAmmit」は、授業改善にとどまらず、日本大学の学生としての学修意欲向上につながっている。

【図表】学生FDの取り組み内容

分類	取り組み	内容
授業についての学生の声を集めて伝える	しゃべり場	教職員と学生が少人数のグループになり、「理想の授業とは」「授業アンケートって必要?」などのテーマで率直に語り合う対話の場
	フォーラム	大学教育の今後について、教職員と学生で考える場を運営する活動
	懇談会	大学の役職者との懇談の場をつくり、学生の生の声を伝える活動
学生の視点を生かして授業をよくする	学生発案型授業	学生の発案のもとに、学生が教員と授業を創り、授業運営までする活動
	よい授業の紹介	授業コンテストや学生によるシラバス作成により、教員に学生の視点を伝えることで授業改善を促し、よい授業に対する学生の関心が高める活動
	授業アンケート	学生独自の授業アンケートや学生視点の設問を取り入れたアンケートを作成・実施し、成果を報告する活動
学生の学びへの意欲を高める	履修相談、ゼミ紹介	新入生の履修登録の手助けをしたり、学生生活のさまざまな悩みや疑問に答えたりして、学びへの意欲、主体性を高めるピアサポート的な活動
	教員インタビュー	教員の素顔や肉声を伝え、学びへの意欲を高める活動
	職員との交流	若手職員と学生と一緒に学内企画を運営したり、職員が学生に大学職員の専門性を紹介したりすることで、学びへの自覚を高める活動
学びの環境改善	キャンパス改善	学生発案の食堂メニューやたばこポイ捨て禁止キャンペーンなど、環境整備につながる活動。本来の活動とは異なり、派生的に生まれた

\*1 「学生、大学教育を問う〜大学を変える、学生が変わる」(2015年、ナカニシヤ出版)

\*2 2009年8月から立命館大学を中心に開催。より多くの大学と学生FDについて共有し、自学の活動に生かすことが目的。2014年度は夏に京都産業大学で行われ、61大学から480人が参加した。